

# “但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

## 第3回「江戸時代の改良（周助蔓）」

どんな牛が良く、どんな牛が悪いという見方が定着してくると、良い子牛は良い母牛から生まれる確率が高いことに気付く人が出てきます。

これに気付くには、親牛とその子牛を見る機会が必要で、良牛を買う資金力も必要です。

江戸時代の“蔓牛”創始者に、富農や家畜商が多いのはそんなことによるのかもしれませんが。

“蔓牛”は、植物の蔓に同じ葉や実がつくように、母から娘、娘から孫とつながる家系によく似た牛が生まれることからその名が付けました。

こうなるには、同じ家系の雄牛を交配して、その家系特有の遺伝子を両親から受け継ぎ、ホモ化することが必要になります。

羽部義孝博士は、もし“蔓牛”がそうしたホモ化集団なら、このような特徴的な形質を持つ家系は黒毛和種の改良に必要だとして、江戸時代の“蔓牛”の調査を提言し、兵庫県では1941年11月、第5代種畜場長奥井廉氏と、同但馬分場長の神原亀松氏が「周助蔓」を調査しました。

小代村役場や前田家等の調査で得られた資料は少なく、古老から聞き取りを行ったが、それにも食い違いがあって相当難渋しました。

「周助蔓」を記したいいくつかの書物があります。「蔓の造成とつる牛」（1948年 羽部義孝）はこの調査結果をまとめたもので、これを基に「兵庫の和牛」（1971年 兵庫県）や「但馬牛物語」（1979年 兵庫県畜産会）は書かれています。この他に、「周助蔓由来記」（1950年 小代村あつた蔓造成組合）、日本農人伝「但馬の牛・前田周助」（1955年 和田博）、「周助が走る」（2012年 前田利家）等がありますが、微妙に食い違い、調査の困難さが想像できます。

前田周助は寛政10年（1798年）に、七美郡小代村（現在：美方郡香美町小代区）猪の谷で生まれました。幼少時から牛が好きで、自家の牛だけでなく近在の牛も見て歩いたそうです。後年、養父市場で周助の牛が人気を博し、ここを仕切った大博労岩田孫左衛門も周助に惚れ込み後援したというエピソードがあります。彼の牛鑑識眼や牛飼いの腕の確かさを物語っているようです。

周助は、文政4年（1821年）23歳の時、河内（現在：大阪府）に牛を売りに行きます。この経験で、良い牛を造れば高く売れ、山間の村を豊かにできるという思いを持ったそうです。博労としての周助は金もうけが下手で、勘当騒ぎまで引き起こしたと伝わっていますが、気に入った牛がいたら金に糸目をつけず買い、その牛を近くの農家や親類に安く譲ったり、預けたりしたのは、彼なりの優良牛地域保留策だったのかもしれませんが。

嘉永3年（1850年）、周助53歳にして、手に入れた牛を基に「周助蔓」を造りました。

しかし肝心要の「周助蔓」始祖牛には3説ありますが、いずれも古老の記憶によるもので、確かな裏付けもなく、信憑性を疑う内容もあります。

周助の曾孫の前田留太郎氏によると、村岡の大新田に良い牛がいるという噂を聞きつけ、早速見に行きました。その牛は周助が理想とする牛そのものでした。

周助はその牛の母や姉を見た上で、言い値で買いました。その価は銀3貫目と、とてつもない高値でしたが、借金して買い求めました。その娘牛の中でも、熊波の井上仁平方に売った牛は27歳まで生存し、良い子牛を生み続けたそうです。

一方、小代村の田野伊太郎氏によると、八鹿に行く途中、八木谷で毎年田を耕す良牛を見つけ、その娘牛を買い求め、始祖牛にしました。大阪の石橋孫右衛門が良牛の産地とした八木谷です。この牛は43歳まで飼った後、葛畑に売られ、そこで3産したと言われています。

また、小代村の藤井勝蔵氏は、周助の孫周三郎氏から聞いた話として、神場の上治五郎衛門方で生まれた雌子牛が始祖になり、この系統から後年「臍蔓」も出たと言われています。

奥井場長らは、前田留太郎説を最も信憑性があるとしています。

「周助蔓」の直系は、神場にあった周助の妻の実家に譲られ、良牛を生み続けました。ここから小代村をはじめ、熊次、射添、村岡、兎塚村に広がったと言います。

当時、雄牛は子牛を産ませる道具にすぎず、「周助蔓」に関しても、雄の話は殆どありません。この辺りでは、種付用の雄牛を集落が管理していましたが、主に地元で調達され、結果的に系統繁殖になって、長命、連産、強健で、小型ですが体の幅があり、骨締、毛質が良い特徴が形成されたと推測されています。

ところが、小代村には「六部蔓」や「臍蔓」など「周助蔓」とは違う特徴を持つ“蔓牛”もいました。それで系統繁殖になったなら、「周助蔓」は偶然の産物ということになります。

ところで、周助は後年種雄牛を重視し、大谷で交配用の雄牛を飼っていた中瀬与左衛門に相当肩入れしていたと言います。また、前田周助顕彰碑には「之レ宛モ英国ニ於ケル近代家畜改良開始ノ時ニ相応スルノミナラズ其ノ手法ニ於イテモ軌ヲ一ニスルハ偶然ノ符号ト言フベキカ」とあります。

ひょっとして、周助は雄牛を無条件に交配したのではなく、交配する雄牛や残す雌子牛を選んでいたのでしょうか。

もしそうならば、意図して「周助蔓」の特徴的な形質を固定したことになりますが、確証はありません。

周助は「周助蔓」を造る過程の記録も彼の意志を継ぐ後継者も残しませんでした。その結果、彼の死後「周助蔓」はその実態を失いました。この辺りがディシュリー・ロングホーン種を造ったロバート・ベイクウェルとの違いかもしれません。

(前県立農林水産技術総合センター所長)